

Title	近世資本主義と地代説 ( ゾムバルト教授の資本主義起源説に対する史的批判 )
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.3 (1913. 7) ,p.503(87)- 542(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0087">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0087</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を得ざる可し。

殊に農業上に於ては各人間利益の衝突少なく、經營の方法概ね相類して同地位者間の結合容易なるものあり。従て組織運動の一度社會の一隅に發生するや、容易に爾餘の方面に波及すること遙に工業界の組織に勝り、其團結亦遙に鞏固なるの傾あるは既に前に述べたる所の如し。伊國に於ける農業労働者の運動が一度其端を發するや、數年にして顯著なる發達を爲せると共に、工業上に於ける労働組合と等しき單純なる労働組合より更に一轉して一部の共同經營を事とせる小作組合に發展せるが如き又正に這般の消息を傳ふるものならざらんや。吾人は決して之を對岸の火災視するを得ざるなり。

## 近世資本主義と地代説

(ゾムバルト教授の資本主義起源説に對する史的批判)

阿部 秀 助

### 目次

- 一、ゾムバルト教授の性行
- 二、近世資本主義論の梗概
- 三、經濟學上の諸概念と資本主義
- 四、近世資本主義と其起源説
- 五、地代説と其反證
- 六、結論

滯歐二箇年其間殊に深き印象を受けしを、ゾムバルト教授となす、氏が直截にして明快なる講義は單に獨逸經濟學界の珍たるのみならず、寧ろ同國學界に於ける稀有の産物たり、氏の父は米國流の所謂、Self made manにして身を貧困の間に起し

て、一代にして富、巨萬を重ねる大地主となりしも、然かも其人や單一なる守銭奴にあらずして、夙に自由主義の理想を懐抱し、最も熱心なる社會改良論者たり、ゾムバルトは實に此の如き理想と努力とを有する父によりて千八百六十三年、エルムスレーベン(ハルツ)に生る、氏の履歴として吾人の知り得るものは、氏が千八百八十二年の頃、ピサ及伯林にて法學及經濟學を修めしと、千八百八十八年、ブレイメン商業會議所員となりしと、次で千八百九十年、ブレスラウ大學の助教授に任せられ、千九百六年轉じて現時の伯林高等商業學校に教鞭を取るに至りし等に過ぎず、(二)遮莫氏の性行を側面的に觀察する時は、吾人にとりて多少の感興なきにしもあらず、彼は富める父を有せし故を以て教育上、充分なる修養を積むを得しと共に、夙に歡樂の巷に逍遙し、且つ世界の各地を周遊して、其間、社會問題に深き興味を感じ、自ら思想上に於ては、ラッサール及マルクスに近づくに至り、殊に後者は一時彼が思想上の獨占者たりしが、最近、マックス、ウエーバー等の影響を受けて、人事の現象は深く人心の根柢に求めざる可からざる底の自覺を惹起すに至れり、又た彼は其性格に於て直情逕行の人にして、自己の學問上に於ける進路を妨ぐるものは、その誰

人たるを不問、之れを一撃の下に粉碎し盡さずんば止まず、斯て彼は屢、其恩師、シエモラーを論難攻撃せり、蓋、現時の獨逸經濟學界の主動力に對する反抗的態度は彼れが最大の慾望にして、加ふるに彼の血脈を廻るの血には殆んど保守的思想の血球なく、猶太民族に通有せる社會主義的傾向は、深く彼れが精神上に蟠り、かくて彼れは、ハインリッヒ、ブラウン、其他社會民主黨の名士と交を結び、殊に、ハインリッヒ、ブラウンの社會文庫の如きは數年間に亘りて、ゾムバルト自からの獨占物たる觀を呈せり、而して彼が新しきを求めんとする努力主義の上に立てることは、常に學生に向て、人一日も進歩の念なからざる可からずとの福音を傳ふるによりて、亦た其書中常に *Ich nehme dies so und so* 或は *Sollte heissen so und so* の語を繰返せるにて、知るを得可し、況んや彼は眼前、只だ朱利の問題を取扱ふ一學究にあらずして、寧ろ大なる藝文の士なり、彼れに與へられたる、ゾラ及、イブセンの感化は、マルクスのそれと異なることなく、その「ブレスラウ」にあるや現時獨逸文壇の覇將、ゲルハルト、ハウプトマン」と交情最も密なりしと云ふ、之れを要するに彼は藝術界に於ける「リヒャルト、ストラウス」、「ホーフマンシュタール」、「ヤコブ、ワッサーマン」の如く獨逸思想界

90 の新傾向を代表する少壯有爲の學者たることは誰人も異論なき處なる可し。(二)

註] I. Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 3A. BVII S. 553. u. Wer ist's? 5A. S. 1380.

註] G. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 27 Jhrg. S. 291-300.

二

若夫れ獨逸の經濟學界に於て能文の士を求めんか、之れを前にしてはブルノー、ヒルデブランドあり、之れを後にしては「グナップ」「ブヒヤ」「グムバルト」あり、而して「グムバルト」の近世資本主義論が著者の豫想(一)に反して世人の注意を集中し、その間賛否の論喧しかりし所以は(二)單にそが文辭の富贍なりしのみにあらずして、寧ろ資本主義の成立及本質を根本的に叙述せる點に於て幾多の新見解を齎らせしを以てなり、由來獨逸の史學界に於て最も論難攻撃を得意とする「ペロー」の如き尙ほ言をなして曰く「吾人の見る處によれば此著近世資本主義論は大なる缺點を有するにも不拘、然かも尙ほ顯著なる特色を有す、即ち其努力的研究と藝術的表現、換言すれば豊富なる研究材料と透徹的なる叙述とが合して一つとなれること之れなり(三)」と、然らば近世資本主義論、上下千三百餘頁は、そも吾人に向て何をか語る。

彼は卷頭先づ經濟組織を論じて、經濟と經營との區別を明白ならしむると共に、更に吾人々類の經濟的發展を種々なる方面より考察せり、即ち次表の如し。

經濟階段	經濟組織	一、	原始的血族經濟……………	營利經濟
		二、	大家族經濟……………	
		三、	廣義の自己經濟……………	
		四、	廣義の自己經濟(但、生産消費の分離せる場合)	
		五、	村落經濟……………	
		六、	都市經濟……………	
		七、	社會主義的經濟……………	
		八、	上古の奴隸經濟……………	
		九、	近世殖民地の奴隸經濟……………	
		十、	資本主義的交通經濟……………	
過渡經濟	五、	村落經濟……………	需要充足經濟	
個別經濟	三、	廣義の自己經濟……………		
	二、	大家族經濟……………		
	一、	原始的血族經濟……………		
經濟主義	(四)			

91 「グムバルト」は以上の分類によりて「ブヒヤ」の經濟階段説を打破せりとなすも、然かも此點に就きては賛否の論少なしとせず、之れを賛するものに「ペロー」あり、彼は

「ゾムバルト」の説が只だ嚴密なる意義に於ける史的關係のみに囚はれざるを以て悦ばしき現象となし、(五)之れに反して「ポール」は此點を以て同著書全部中に於ける最大弱點を有する處となし、尙ほ經濟階段、經濟組織、經濟形態、經濟時期、經濟主義等の諸概念は徒らに讀者をしてその複雑なる分類に迷はしむるのみ、之れによりて大なる認識的價值を見出すの不可能なる所以を指摘せり、(六)次に「ゾムバルト」は第一篇に於て工業的労働者の努力より發生する經濟形態たる手工業の中世後半期に於ける典型的組織及之れが存在の條件を明かにし、且つ手工業者の利得は只單に日常生活を維持するに止まり、其財産は何等資本的性質を有せず、何となれば近世的意義に於ける資本なるものは只單に其所有者の生計を維持すると云はんよりは、寧ろ新しき資本を集積せんとするにありとなせり、此の點に於て「ゾムバルト」は「マルクス」と略同一の見解を抱けりと云ふを得可し、第二篇は近世資本主義の發生史にして、著者は先づ此篇に於て資本力の成立要素として、地代と殖民經濟とを主なるものとし、更に進んで資本主義的精神、工業的資本主義の初期と之れが發展上の障害物とに論及し、加ふるに現時に於ける工業的資本主義の發達、手工業と

手工業者との状態とに及べり、而して以上の研究範圍は其間多少の除外例あるも多く獨逸に關するものなるを以て、此一巻は或意味に於て獨逸經濟史殊に獨逸手工業史と稱するを得可し、第二卷は資本主義發展の理論的研究なるも、之れを或一面より見るときは、又た近世獨逸經濟史及産業史たり、而して著者は第一篇に於て産業上の自由の如き、新技工の如き或は經濟生活の新式に就きて論じ、殊に其最後の章に於ては「ゾムバルト」獨得の叙述と犀利なる批評眼とを窺ふを得可し、次に第二篇經濟生活の形態に於て近世的農業組織の成立、近世的都市の起源及本質、需要、販路の形態を論じ、最後の篇を以て工業上の競争に關する理論的研究にみて、殊に其最後の章に於て現時に於ける手工業の衰微と之れが救濟策とを論せり、想ふに、吾人が著者に就きて見る處は、其觀察の奇抜なると叙述的能力の發達とにあり、殊に新概念と區別的説明とによりて事物の意義を明かにせんとするは著者の最も重要視する處たり、哲學史家「ウインデルバント」嘗て「レッシング」を評せる中に「吾人は「レッシング」に就きて透徹的概念を求めんとせし、「ウォルフ」の面影を認む、然かも尙ほ「レッシング」は單なる一般的抽象化を以て足れりとせずして、更に事物の純全たる

區別を求めんとせりと此語は以て「システム」をも適用し得可しと信ず。(中)

註1 W. Sombart, Moderne Kapitalismus, BI, Einleitung, s. XXX IV.

註2 G. v. Below, Die Entstehung des modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrift, B. 91 S. 432.)

I. Strieder, Zur Genesis des modernen Kapitalismus.

H. Siereking, Die Mittelalterliche Stadte (Vierteljahrsschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte, BII S. 177)

G. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 27 Jahrg. S. 291.

Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik III. F. B. XXVI, S. 356.

Sozialistische Monatsheft, Jahrg. 1902. Septemberheft.

Nenen Zeit, Jahrg. 1903. S. 465.

Kultur, 1903. Heft 17.

Prenssische Jahrbücher, B. 113, S. 333.

Zukunft, Jahrg. 1903, S. 405.

Otto Rieke, Der Fabrikbegriff und die Handwerkerorganisation (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. B. XXIV. S. 185.)

B. Harms, Darstellung und Kritik der Wirtschaftsis- und Betriebs-Systematik im Sombartschen „Kapitalismus“ (Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 29 Jahrg. S. 1384.)

G. Beckmann, Die Bedeutung des Handels im wirtschaftsleben des Mittelalters nach den Darstellungen Sombarts und

Lamprechts. (Beilage zur Allg. Zeitung, 1904. Nr. 106-108. Deutsche Literaturzeitung, Jahrg. 1902.)

F. Walker, Kapitalismus und Handwerk, (Historisch=Politische Blätter Jahrg. 1903.)

K. Jentsch, Zur Naturgeschichte des Kapitalismus (Die Zeit 1902. Nov. 15)

C. Heiss, Der moderne Kapitalismus. (Beilage zu Allg. Zeitung 1902 Nr. 257)

Neumann, Die Vorgeschichte des Kapitalismus (Die Zeit, 1902 S. 35)

Volkswirtschaftliche Wochenschrift. 8. Mai. 1902

W. Korguis, Zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus. (Politisch=Anthropologischen Revue, Nov. 1902.

K. W. Der moderne Kapitalismus (Tägliche Rundschau, 27. April, 1905)

Münchener Neueste Nachrichten, 31. März. 1903

Weserzeitung, 24, April, 1902.

R. v. Ehrhardt, Prof. Sombarts werk übe den modernen Kapitalismus. (Wiener Abendpost, 18. Juni, 1902)

Süddeutscher Börsen=Courier, 26. April, 1904)

Der Tag, 10. Juli, 1902.

H. Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie BI. Grundlegung.

R. Häpke, Die Entstehung der grossen für gerichtlichen Vermögen im Mittelalter. (Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung- und Volkswirtschaft im Deutschen Reich 29 Jahrg. S. 1051)

G. Caro, Neue Beiträge zur deutschen Wirtschafts und Verfassungsgeschichte. S. 130.

R. Davidsohn, Forschungen zur Geschichte von Florenz, 4 Teil S. 268.

註三、G. V. Below, Die Entstehung der modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrift B. 91. S. 432)  
註四、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. B1. S. 67.

註五、G. V. Below, Über Theorien der wirtschaftlichen Entwicklung der Völker, mit besonderer Rücksicht auf die Stadtwirtschaft des deutschen Mittelalters (Historische Zeitschrift B. 86.)

G. V. Below, Die Entstehung des modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrift B. 91)

註六、Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik III7. B. 26. S. 358.

註七、W. Windelband, Die Geschichte der neueren Philosophie 5A. B1. S. 545.

三

現時に於ける獨逸經濟學の病は、その餘りに概念に囚へられ、甚しきは之れが奴隸たらんとするにあり、換言すれば、概念の固定性を以て實在の流動性を再構成せんとするの餘りに甚しきにあり、そも概念とは本來、事物の符號又は象徴的代用者にして、其現す處は其對象と之れに類似の對象との比較即ち共通なる點に過ぎず、故に之れを一面より見る時は概念を如何に排列結合するも、其得る處は只だ對象の皮相的改造に過ぎざるなり、ベルグソンの所謂幾多の象徴的表現によりて事物の具體的統一を分離せしめんとする點に於て、單純なる概念は不都合なるのみ

ならず、又た哲學上に幾多の學派を生じ、是等の學派は各次概念の玩具によりて絶ゆるなき遊戯を繼續せり、(一)との言は、移して現時獨逸經濟學の弱點を指摘せるものと云ふを得可く、例者、此の學の根本概念と稱せらるる「財」に就きて見るも、「フロン、フィリップウ、キッチ」の如きは、吾人々類の勞力肉體的、精神的は經濟上の財たる能はずとなし、之れに反して、「フオンウ、キッガー」と、「ベエーム、バエルク」とは、人類の勞力も亦た經濟上の財たるを得るとなせり、(二)次ぎに「資本」なる概念に就きても、異論多く、「ベエーム、バエルク」は資本を以つて生産的資本の意義に解し、其の要素として、天然力及び人類の勞力を擧げ、奧太利學派の泰斗「カール、メンガー」は之れを通俗に解釋して、營利行為に使用せらるる資金となせり、然かも本問題は尙ほ解決せられずして、米の經濟學者「クラーク」對「ベエーム、バエルク」の論争を惹起すに至れり、(三)而して以上、兩概念と同じく、經濟學上に於ける論争の問題となりしを資本主義の概念となす、彼の「チード」の如き、「マーシヤル」の如き、「セリグマン」の如き、「フィリップウ、キッチ」の如き、何等此語の意義に就きて論せざるものは、姑らく之れを措くも、然かも、「ワグナー」の如き、「シムセラ」の如き、「エーレンベルヒ」の如きは、何れも此の概念の構成を否定せり、蓋是等反對

の主なる理由とするところは、(一)此の概念は明白透徹の意義を缺けること、(二)此の概念は經濟發展上餘りに資本の意義を重要視し、爲めに資本家は憐む可き労働者を掠奪するものなりとの野蠻的心念を惹起さしむること、(三)此概念を定義とすることは方法論上の誤謬に陥ること、(四)此概念は現實界に於て何等求むること能はざる空想の産物たりとなせり、洵に以上否定論の中には一面の眞理を有せるものあり、例者、マルクスの如きは其書中屢資本主義なる語を繰り返せるも、その求むる處は認識的價值にあらずして、常に一種の倫理的黨派的色彩を有するにあり、而して斯くの如き倫理的黨派的意義に基づく資本主義が學問上の目的に適せざることは、ゾムバルト自からも認めしが如し、(四)又た、ベエム、バエルクの如きは資本主義を解釋して、資本財の適用せらるゝ生産の場合或は資本の所有者即ち資本家の指導の下に生産せらるゝ方法となせり、(五)更に、ゾムバルトは此概念を明白ならしめんが爲め次の如き特徴を列挙せり。(六)

(一)資本主義的經濟組織にありては、經濟生活の中心が共産的經濟組織に存せずして、個々の私經濟的組織にあり、而して此經濟組織の運用者は、單に消費的方

面の傾向及方法を決定するのみにあらずして、同時に生産の方面に於ても然りとせず、換言すれば、彼は經濟上の優越權を握り自己が業務遂行の前途に横はる利益及損失を負擔するものなりとす。

(二)資本主義的經濟組織は所謂、自給自足の經濟組織と異なりて、各次の經濟組織間には分化的職業を有すること。

(三)資本主義的經濟組織は中世に於ける所領經濟の如きものと異なりて、市場的(交通經濟的)組織を有すること。

(四)資本主義的經濟組織は彼の手工業組織と異なりて、生産の要素が總て一人の手に存せずして、永續的に社會の種々なる團集に存せること。

(五)資本主義的經濟組織にありては、生産要素たる勞力には既に分化作用行はれ、指導的組織的労働と實行的労働との間に其人を異にするに至れること。

かくて、ゾムバルト教授は以上述ぶる如き特徴によりて、資本主義の概念を固定せんとせるも、その概念其者が、確實に實相を捕ふる能はざること、吾人が既に前に述べたるが如し、論者は、ゾムバルト教授も亦た獨逸學界の風土病たる概念に囚へ



られし一人たることを記せば即ち足る。

- (註1) Henri Bergson, Einführung in die Metaphysik S. 12-13.  
 (註2) V. Philippovich, Grundriss der politischen Oekonomie. S. A. B1 5. 7.  
 V. Wieser, Ueber den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes S. 42  
 A. Amann Der Gütsbegriff in der theoretischen Nationalökonomie (Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung B19. S. 402)  
 (註3) V. Böhm-Bawerk, Capital und Capitalzins 2A. 2Abt. S. 15-237  
 Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften 3A. Bv. S. 781  
 C. Menger, Zur Theorie des Kapitals. (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik N. 7. B. XVII S. 1)  
 I. B. Clark, Ueber das Wesen des Kapitals. n. Böhm-Bawerk, gegen Bemerkungen betreffend. n. "Das Wesen des Kapitals." Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozial Politik und Verwaltung B XVI  
 V. Böhm-Bawerk, Einige strittige Fragen der Capitaltheorie (Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung B XXIII)  
 (註4) W. Sombart, Der Kapitalistische Unternehmer (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik B. XXIX S. 691)  
 (註5) I. Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften 2A. Bv. 2S. 25-26  
 (註6) W. Sombart, Der Kapitalistische Unternehmer (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik B. XXIX S. 693-694)

四

「ゾムバルト」は哲人「カント」が嘗て純理批判に於て述べたる「内容なき思索は空虚に

して、概念なき観照は盲目なり」との意義を、其著書の巻頭に掲げし如く、彼は自己の概念を更に史的證左によりて透徹的たらしめんとせり、かくして彼は近世資本主義を構成せし資本の發生條件に對するの史的基因を(一)貴金屬探掘(二)殖民經濟(三)集積的地代に求めたり、殊に最後の者を以て、此の問題解決の最大要件となし「Capital」となせり。

蓋探掘の事業は其歴史極めて古く、紀元前三千年埃及人は上部埃及、テベス地方にて此事業を開始し、紀元前二千年、アッシリア人は、チグリス上流の地方にて銅鑛を發掘せしとあり、降て、フェニシア人は、西班牙の南部及希臘、トレチア地方にて金銅を採掘し、希臘人が、アッチカ南端の、ラウリオンより得し銀、鉛、銅は、デミストクレスをして波斯の大艦隊に對抗せしめし戦艦二百艘の建造費となるに至れり、羅馬は、カルタゴ滅亡後、シシリー、サルデニア、西班牙の鑛山權を握り、更に其勢力の東方に及ぶや、小亞細亞、希臘、マセドニア地方の鑛山をも獲得するに至れり、當時「ストラボ」の記する處によれば、西班牙の鑛山のみにて四萬人の工夫を使役せりと、次に中世にありて、「メキシコ」及「ペルー」に相當する地方は獨逸及奧太利の地方にして、例者「エルサ

ス、ロートリンゲン「レーバードール」マヌミンステル「シュワルツワルト」マンスフェルト「ゴスラー」ハルツ「フライベルグ」ザクセン「トリエント」イグラウ「クッテンベルグ」ベームの如き金、銀の産地として有名にして殊に十五、十六兩世紀に亘りては、アンドレアスベルグ「ゴッデスベルグ」タルノウキツ「シユネーベルグ」アンナベルグ「ヨアヒムスタレル」「シュワツ」の如き豊富なる金銀鑛發見せられ、爲に歐洲に於ける貴金屬の産額は著しく増加するに至れり、即ち奥、匈兩國地方より採掘せらるゝ金の平均年額は千四百九十三年より千五百二十年に至る間は、五百五十八萬麻、千五百二十一年より千五百四十四年の間は、四百十八萬麻、千五百四十五年より千五百七十年迄は、二百七十九萬麻、千五百六十一年より千五百八十年迄は、二百七十九萬麻、千五百八十一年より千六百年迄は、二百七十九萬麻、而して銀の産額に就てきは千四百五十年より千五百年迄の間は、平均一年の産額八百萬麻、千二百五十年より、千四百五十年の間は平均年額五百萬麻、十三世紀の前半期と十二世紀と平均三百萬麻、十一兩世紀は約二百萬麻、八、九兩世紀は約一百萬麻なりとす、(二)而して是等の産地を所領せる者或は之れを發見し、經營するものにとりて、以上の産出が直接に各次の財産の集

積的要素をなせしことは明白なる事實なり、例者、我邦にありて徳川三百年の治を開きし徳川家康の經國策は其根本の一原因を彼が財力の豊富なる點に歸せざるを得ず、何となれば當時に於ける彼は武田氏の遺臣、大久保長安を信任して、伊豆、石見佐渡に於ける金銀山を獨占せしを以てなり、當時、我邦にありし基督教の師父が本國に送りし報告中に

「内府(家康)は日本に於ても、京都に於ても、關東に於ても、歴代の中にて、尤も富裕なる君にして、巨額の金銀を蓄積し、之れが爲め、到る處に頗る人々に恐れらる、内府の京都方面にある時の住居なる伏見の第に貨幣を貯藏したるに數箇月前、其重量の爲めに梁折れて一室陷落したり、此莫大なる財寶は獨り諸人よりの數多の豊富なる獻上物に依るのみならず、重に日本にある處の數多の金銀鑛山より來るものにして、内府は悉く之れを獨占す、加之、近頃再び發見せられ、毎年非常の高を掘出すことゝなれり、(二)」

家康は金銀を獨占せし故を以て、慶長六年銀座を伏見に設け、大黒常是に命じて白銀の品位を定め、金銀貨を改鑄せしめし以來、慶長十三年には伏見の銀座を京

都に移し、次で慶長十七年には江戸に銀座を設け、又大阪及長崎にも之れを置きて、専ら異國への渡銀に對する用を辨せしめたり、斯くの如く自己の權力の擴張に於て、務めて統一的貨幣制度の實績を擧げしことは、マルコポーロ以來貴金屬に富むとの我邦に對する傳説を實際にし、家康の商政をして、當時に於ける歐洲諸國の商業政策と密接の關係を有せしむるに至り、併せて家康が政治的基礎を鞏固ならしむるに至れり、(三)又之を私人の經營に就きて見るに、彼の「アウクスブルグ」に於ける大富豪たる「フガー」家歴代中、殊に家運の隆盛を來たせし「ヤコブ・フガー」は「ゼノアのアントニオ・デ・カゾリス」と協同して當時資金の缺乏を感せし「テロルの領主・チギスマント」に前後、約十七萬「フロリン」を貸與し、之が抵當として、「シュワツ」鑛山を獲得せし結果、此方面よりの年々の収入は二十萬「フロリン」に達し、かくて彼は漸次其手を擴げて匈牙利、チュリンゲン、西班牙地方に及ぼし、爲めに其資産は千五百二十七年には二百萬「フロリン」と爲り、前後十七年間に九百二十七「パーセント」の純益を得るに至れり、(四)然れども、斯くの如き巨額の直接的蓄積は既に其以前に於て此企業を經營するに相當なる準備資金なからざる可からず、故に之れを以て直ちに資本主義

發生の原形態となすこと能はざるなり。

次に殖民地經濟が、近世資本主義の運動にとりて極めて顯著なる意義を有すること、は、元より疑ふの餘地なし、而して當時に於ける殖民地經濟の主要なる要素は、殖民地産物の輸入と奴隸商賣となす、前者に就きて、「アウクスブルグ」の大富豪たる「ウエルザー」は千五百三年「リスボン」に支店を設け、時の葡萄牙王「ドン・エマヌエル」より印度貿易の特權を得、その翌年六萬六千「デウカット」の資を投じて三艘の船を印度に赴かしめしが、そが齎らせし香料及寶石は百七十五「パーセント」の純益を以て販賣せらるゝに至れり、(五)又た英國は近世史上、奴隸商賣の國として有名にして、彼の「リバープール」の如き、倫敦の如き、「ブリストル」の如き何れも歐洲に於ける之れが取引の中樞地にして、例者、千七百八十七年奴隸買入の爲め亞弗利加に赴きし、同國船の數は百三十七艘、其噸數二萬二千二百六十三、奴隸買入の爲め持參せしものは小刀、鐵砲、火藥、綿織物、羊毛品、麻布等にして、之れに價額を附すれば約七十萬磅、而して是等の船舶にして亞弗利加の海岸に着せるものは即時、十四の英國商館を通じて奴隸の買入に従事するものと、一方には直接、黒奴の商人に就きて取引するものと

あり、又奴隷は丁年以上の男子平均の價額十五磅、尙ほ八週間航海の後、西印度に上陸して賣渡さるゝ際の價額は三十五磅、但、航海の途次にて疾病、自殺、其他の事項の爲め七十五パーセントに減ずるを常とす、次ぎに是等の賣却せられし奴隷は多く英、西佛等の殖民地に於ける甘蔗栽培に従事せしものにして、當時、世人は彼等を稱して黒色金剛石となし、殖民地經濟上、最も重要な要素となせしを見て、其意義の極めて大なりしことを知るを得可し。(六)

以上述ぶるが如く、殖民地經濟は近世資本主義發展上、極めて重要な意義を有せしことは事實なるも、然かも是等の事業たるや貴金屬採掘の場合と同じく、準備的資金を必要とする點に於て、必ずしも近世資本主義發生の根本的要素と見ることは能はざるなり。

註一 W. Sombart, Der Moderne Kapitalismus, B. I. S. 274-275.

註二 Lettera anura Scritta dal Giappone al p. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di gieso dell' Anno 1603. p4

註三、拙稿「徳川宗康」の商政と「メルカントルシステム」との關係を論じて、彼が通商獎勵の動機に及ぶ(史學雜誌第一四編一二四〇—一二四六)

註四 A. Sander, Das Haus Fugger von seinen Anfängen bis zur Gegenwart. S. 32 u. 37.

F. Döbel, Der Fugger Bergbau und Handel in Ungarn (Zeitschrift des historischen Vereins für Schwaben und Neuburg. 1876)

註五 Falke, Die Geschichte des deutschen Handels III S. 20.

註六 F. Hoehnsteiner, Die Abschaffung des britischen Sklavenhandels im Jahre 1806-1897 S. 2-9.

(Sammlung Volkstümliche Vorträge zum Verständnis der Nationalen Bedeutung von Meer & Seewesen Heft 52)

## 五

以上述べしが如く、貴金屬の採掘と殖民地經濟とが、必ずしも近世資本主義發生の「プロトプラズム」たらざるに於て、「ゴムバルト」教授は、果して、何處に之れが秘密の鍵を求めしか、本論文研究の眼目は實に此點に存す。

蓋、中世紀末より近世にかけて、西部歐洲の諸國に幾多富豪の存せしは事實たり、而して是等の徒によりて運用せられし資金の集積作用に就きては、「ゴムバルト」教授は在來の商業説を排して地代説を主張せり、蓋彼をして斯くの如き説を主唱せしめし所以は、一はマルクスの資本論の感化に基くと共に(一)又、地代説は當時にありて、社會主義及自由主義及商業過重の論客に向て殊に好題目として取扱はれしものにして、即ち「ロリア」「ヘルツカ」「ヘンリー」「デュー」「オッペンハイマー」等の徒に見るが如く、所得又は財産の不平等を以て地代説の上に築くとは、自ら彼の思索を動

かして、資本主義發生の根本的基礎を此地代説に置かしむるに至れり、而して彼は自己の説を確實ならしめんが爲めの豫件として、中世に於ける商業の資本主義的意義を否定せり、即ち彼の論ずる處によれば、中世以來の商業なるものは各次の財産を蓄積する爲めには其販路餘りに狭少にして、且つ運送費は高額に失するを以て、従つて利益少く、其經營は全く手工業的なりとなし、更に大企業家と稱せらるゝ金權的豪族は職業的に商業を經營せるものより生れずして、寧ろ都市の内外に廣大なる地面を所有せし或は所有せる徒輩の間より發生せりと云ふにあり、即ち此 *nouveaux riches* を産出せし要素は都市内に自由的に或は強迫的に移住せし地方の豪族と、狹義に於ける *Patriciat* 即ち我邦の草創名主に類するものによりとなせり。(二)

之れを江戸幕府の時代に見るに、名主の中には私に類別を立て、四等となせり、第一は草創名主にして、江戸時代には廿九人あり、是等は其家の祖先が自から開きたる町々の名主にして、天正以前より居住せるもの、又は徳川氏に従ひて三河、遠江等より移住せるものにて、名主中最も權威を有するものなり、第二は古町名主と稱せらるゝものにて、文化時代には七十九人あり、草創名主に次ぎて古くより其町に居住せるものにて、此二種

の名主は歳首及大禮の際、江戸城に登りて物を獻じ、謁を賜はること町年寄に同じ、其三は平名主にして地方より町方支配に屬せし新町家の名主なり、其四は門前名主にして、寺社門前町家の名主なり、

又た *Patriziat* は戰國時代に於て泉州堺の民政の中心をなせし、納屋ナヤとも相似たる處あり、糸亂記によれば海岸に納屋を持ち之を貸して取得となせる者を上分の者と稱し、納屋貸衆とも稱し、其中大なる者十人を十人衆と云ひて、公事訴訟の類は總て此十人衆によりて裁決せられたり。

蓋草創名主及一般町人が都市の内外に於て地所を有せしことは、必ずしも否定す可きことにあらず、例者、キョルン「リュベック」、ブレーメン「バーゼル」、ウオルムスの如き何れも市内の居住地の多くは、所謂草創名主の所有に歸せしものなるも、(三)然かも是等の地面より收得せらるゝ収入は、さして大なるものにあらず、加ふるに其初期に於て極めて少額なりしものを急激増加せしめんとして常に他の大地主たる寺院及地方自治體等の激烈なる反對あり、かくて地面の貸借は多く永代借地の形式に於て實行せられしものなりとす、(四)而して、ゾムバルト教授は近世資本主義的經濟組織を築きたる資本其者が地方豪族及草創名主によりて收得せられし地代の變化に過ぎざることを確實に證せんが爲め、著者の所謂文書的證明の研究方法

を採用せり、而して之れが史的立證の爲め著者が最も力を注ぎしは獨逸にありては南獨アウグスブルグ以太利にては、フロレンス及ベネスとなす、(五)論者は之れより著者の研究を中心として之れが史的批判をなさんと欲す。

南獨アウグスブルグの企業的發達は單に其位置の如何によるにあらずして、寧ろ綿織物の如き、金細工の如き見る可きもの多かりしによる、殊に後者に就きては熟練なる手工業者を有し、其精巧なる點に於て、此地の産に匹敵し得るものは只だ「ニュルンベルグ」ありしのみ、尙ほ他に「アウグスブルグ」に於ける特徴は投機事業殊に鑛山事業によりて巨額の財産を集積せし傾向の著しかりしことなりとす、(六)而して「ゾムバルト」教授は此都市の商業史的研究に對して殊に次の諸點に留意す可きことも云へり。

- (一)「アウグスブルグ」は昔時より地方豪族の移住多かりしこと。
- (二)「アウグスブルグ」の草創名主は早くより地方の豪族と親戚關係を結びしこと。
- (三)「アウグスブルグ」の草創名主は夙に地方に於て大地面を所有せしこと。
- (四)「アウグスブルグ」の草創名主は大多數、商業に轉業せること。

(五)地方豪族にして「アウグスブルグ」に移住せし結果、市民權を獲得せしもの、中には屢々商業を營めること。(七)

ゾムバルト教授が以上の立論を證せんが爲め参考せし「ステッテン」の「アウグスブルグ名家志」(P. von Stetten, Geschichte der adeligen Geschlechter in der freyen Reichs-Stadt Augsburg)が史料として極めて價值少きことは姑らく措くも同教授が同書によりて同市に於ける地方豪族の移住者と見做すものに、「アイスリンゲン」、「バウムガルトナー」、「ベッケン、フォン、ベッケンシュタイン」、「ボイセル」、「エーゲンベルガー」、「エンゲルシャルク、フォン、ムルナウ」、「エルリンゲル」、「イルスンク」、「イムホーフ」、「フォン、デル、ローゼン」、「ウォルフエン、フォン、ウォルフスタール」、「ツェラー、フォン、カルテンベルク、ウント、エップファハ」あり、以上の中、「アウクスブルク」の資本家として顯著なる地位を有せしは、「バウムガルトナー」と、「イムホーフ」の二家にして、「エゲンベルガー」、「エンゲルシャルク」、「イルソソク」の三家は其富の程度に於て遙かに劣れり、況んや其他に至りては一も稱す可きものあらず、(八)先づ「バウムガルトナー」に就きて考察するに、同家の故地が「ジーベンブルゲン」にあることは、「ステッテン」が主として参考せし、「マインリヒ」の「アウクスブルク」系圖帳

にありとなすも、此書久しく世に傳はらず、故に如何なる程度まで信ず可きやに就きては明かならず、但、同家が「ミュルンベルク」に移住せし後、千四百六十五年「アントニ・パウムガルトナー」は破産の不幸に遭遇し、遂に同市を去りて一時「ブランデンブルク邊境伯アルブレヒト・アチレス」に仕へ、更に轉じて「アウクスブルグ」に來り、千四百七十五年「ウルリヒ・アルツト」の娘「クラ」と結婚せり、當時「アルツト」家亦た家運衰微せしを以て「クラ」は何等の財産を齎らすことなかりき、即ち假りに「パウムガルトナー」を「シュッーベン」の土豪の血統となすも、然かも其の所領地代が少しも彼が財産の本質をなさざりしとは彼の財産が破産以後に集積せられし事實によりて知るを得可し、而して彼の富の基礎は當時にありて屢、勤勉なる商人が獨立商店開業の手段として代理商を試みたるが如く、彼も亦た此代理商によりて商業上の資金を集積し、次で其子「ハンス・パウムガルトナー」の時に至り、「ベネス」方面の商業と、「カウシュタイン」殊に「シュワッツ」銅山の經營とは同家をして「アウクスブルク」屈指の富豪たらしむるに至り、其納税額に於て「フッガー」と肩を並ぶるに至れり、次ぎに「イムホーフ」に就きては確實なる史料の吾人に示す處によれば、同家は「ラウギンゲン」の町人にして、後

ち「ミュルンベルグ」及「アウクスブルク」にありて専ら「ベネス」方面と取引に従事せしものなりとす、其他「イルスング」は其系統に於て「バイエルン」の土豪なるも、しかも長時期に互れる戦役は其が所領の多くを失はしめ、同家をして「アウクスブルク」に移住せしむるの已むなきに至らしめ、「エンゲルシャルク」は土豪の町人となりしものにあらずして寧ろ町人より土豪と化せしものなりとす、即ち「グムバルト」教授が注意せし第一及第五に就きては吾人は次の如く結論せんと欲す。(九)

(一)「グムバルト」教授によりて列舉せられし、土豪にして「アウクスブルク」に移住せしもの、多くは同市に於ける大商人の階級又は大資本家として殆んど何等の意義を有せず。

(二)「グムバルト」教授が列舉せし中、大資本家として算するを得る五家に就きて見る時は次の如し。

(A)「エンゲルシャルク」は町人の土豪と化せしものにして、「グムバルト」教授が意味するが如く、土豪の町人となりしものにあらず。

(B)「パウムガルトナー」と「イルスング」の兩家は彼等が「アウクスブルク」に移住

し來りし當時にありては其財産には所領の地代として認む可きものなし。  
 (C) イムホーフは千三百九十六年に於て僅かに小額の資本を運用せし一商人  
 にして、彼の富は此商業的資本の漸次集積せられしものなり。(十)  
 ゴムバルト教授が擧げし第二の問題即ち草創名主が地方の豪族と姻戚関係を  
 有せしことは事實なり、然れども此事實は、只だ地方豪族として都市に移住し、或は  
 都市の町人として地方に轉ずる機會を與ふるに便なりしのみにして、地代説に向  
 ては直接の動因となるものにあらず。

次に確實なる史料によれば、十四世紀に於ける、アウグスブルグの草創名主六  
 十五名の中、自身、商工業より遠ざかりて、其財産を純全たる地代集積の基礎に置く  
 ものと思考せらるゝもの其數四十二名(十二)之れに反して、商工業に従事せしもの  
 其數二十三名(十三)而して前者四十二名の中、資本家として許す可きものは只だ一  
 レーリングゲル家あるのみ、然かも同家に於ける資産は又た商業上の利益に負ふ處  
 多きにあらずやとの疑なき能はず、何となれば十四世紀より十五世紀にかけて、同  
 家の家運を隆盛ならしめし、ウルリヒ、レーリングゲルは千三百九十八年、クラウス、ウッ

ンデルなるものと共に百二十八、フロリンの税を納付せり、凡てアウグスブルグの  
 租税帳に於て二名合同の下に課税せらるゝ場合は多く合名的商事經營の場合に  
 限られしものなりとす、而して、クラウス、ウッテンデルは千四百十三年前後に於て、ベネ  
 スと商業上の取引に従事せり、又ウルリヒ、レーリングゲルの親戚に同名の者ありて、  
 専ら、ベネス方面と商業上の關係を有せしを見れば、論者は、レーリングゲルの資産を  
 以て悉く地代集積の結果と斷定するの或は早計にあらずやと信するものなり、此  
 方面の研究者として有名なる、ヤコブ、ストリエダーの如きは商業に轉せざる、アウグ  
 スブルグの舊家にして、少くとも十四世紀の終末以來は何等大なる財を集積せし  
 ものあらざることを云へり。(十三)

次に商工業に轉せし二十三名の中、アウグスブルグの資本家として其の名を  
 擧ぐるに足るものは、ゴスセムブロット、ヘルワルト、ラウギンガー、セイテング、フッ  
 ステル、レム、スルツェル、ヴェルザーの八家となす、先づ、ゴスセムブロット家が始めて  
 商業を經營せしことの史料に見ゆるは、ジグムント、ゴスセムブロットにして千四百  
 八年の彼れの納税額は僅かに五、フロリンにして、其の資産は六百、フロリン以上に



達せず、然るに其後十年間に於て其資産は五倍以上となり、それが逝きし際には、同家の納税額は二十九、フロリン、其資産は約三千五百、フロリンを以て評價せらるゝに至れり、而して同家の所有にかゝる地面は極めて少く、斯くの如き資産の増加は、ベネス方面との商業上の利益より生ぜしものなりとす、次ぎに、十六世紀の初期に於て商業殊に兩替業を以て有名なるは、ヘルワルト家にして、同家にて初めて商業に従事せしものは、ヘルワルト、ヘルワルトにして、彼れは千三百六十八年の頃、アウグスブルクに於ける自己の住家をたゞみて以太利の、トレビゾに移住し、専ら、ベネス方面に赴くを欲せざる獨逸商人の爲めに之れが仲買商として棉花等を販賣し、千四百二十年を以て同地に逝けり、彼に三子あり、即ち、ハンス、アンドレアス、ヤコブ、之れなり、而して同家は殊に第三子、ヤコブによりて著しき發達をなせしことは、長子、ハンスの納税額が千四百十一年に於て約二、フロリンなるに、ヤコブは既に千四百五十年に於て十七、フロリンを納付せし事實と、彼等の合名的會社に對して *Jachoms Erbote Fratelli* の號ありしを以て知るを得可し、蓋、ヤコブは、アウグスブルクの名家たる、ハンス、レム、の婿にして、其人となり企業的能力に富み、盛んに棉花及麻 (*Bochasini*)

等の販賣に従事せしことは、彼をして非常なる資産を蓄積せしむるに至れり、次ぎに、ラウギンガー家に於て初めて資本家的の活動をなせしものは、ハンス、ラウギンガーにして、其初期に於ける資本額は約五百、フロリンに過ぎず、然るに此僅少なる資本は、爾後四十年を経て著しく増加し、千四百四十年、彼が死せし際、其遺産は一萬三千、フロリンに達せり、而して此収益の多くは棉花及食鹽等の販賣の結果によりしものなりとす、次ぎに、モイチング家にては、コンラット、モイチングが千三百六十八年を以て織物業の組合に加入せしことは、現時、アウグスブルク市立圖書館所藏の史料の明かに示す處たり、而して彼れ逝きし後、その寡婦が納付せし税額より推考するに、其遺産は僅かに百、フロリン内外にして、此僅少なる資本を以て少、コンラット、モイチングは父の遺業を繼ぎ、傍ら商人の組合に加入し、更に其子、ハンスの時代に於て同家の財産は等しく増加し、彼れ逝きし際は其諸子は約二萬四千、フロリンの遺産を相續せり、而して斯くの如き急激なる資産増加の原因は主として、ベネス方面との商取引の結果によるものなりとす、次ぎに、フオスラルに就きて見るに、同家の資産が商業上の利益によりて集積せられしものなることは同家の家記の明かに

吾人に示す處たり、次に「レム」家は「アウクスブルグ」の舊家にして、且つ同市に於ける屈指の富豪に屬す、而して此資産の基礎を造りたる「ハンス、レム」に就きて、其曾孫たる「ルカス、レム」の記する處によれば、彼れは千三百五十七年、一切の家財を賣却して約五百「フロリン」を得、直ちに「ベネス」に赴きて、十七年間商業に従事し、千三百九十六年即ち彼れ逝きし際には、同家は「アウクスブルグ」屈指の富豪となれり、而して其富源は主として棉花販賣にありとす、次に「スルツェル」が地方に於て大地面を有せしことは明かなる事實たり、只だ同家の企業が果して地代によりてなされしか、或は是等の不動産を動産化せしものにあるかは不明なるも、同家の系譜帳の寫本は現時「アウクスブルク」文書館の所藏たるも、其記述は十八世紀の初期より始まり、舊き部分は全く缺如せり、元來、同家は「アウクスブルク」の資本家としては何迄「ベネス」等顯著なる意義を有せず、若強ひて其人を擧ぐれば、千五百八年より千五百十二年に於ける獨逸商館(Fondaco dei Tedeschi)長たりし「リエンハルト、スルツェル」なるも、其資産は全く自己の商事上の經營によりて集積せられしものにして、其額も亦五百「フロリン」以上に達せず、最後に「ウエルザー」家は「アウクスブルク」にては「フガー」に次で有名

なるに不拘、同家が商業を開始せしは千三百六十八年以後なりとの事實の外更に多く聞く處なし、只だ千四百四年の同市租税帳によれば、當時「ウエルザー」家の當主たる「バルトロメ、ウエルザー」の納税額は二十「フロリン」なるを以て、其財産は二千四百「フロリン」と推定し得るも、此資産は千四百三十九年減じて二百四十「フロリン」となり、故に「バルトロメ」以後の「ウエルザー」家の資産は千四百七十三年以後に於ける其四子「バルトロメ、ルカス、ウルリヒ、ヤコブ」の商業的活動に歸せざるを得ず。(十四)

以上述べし以外に「エーム、ビムメル、マルチン、ワイス、リエンハルト、ワイス、ヘムメル、ライン、アルツト、ハウス、テッテル、ヨス、クレメル、ハレス、テムメル、マイン、ハンス、スチルリン、ミッヘル、エルデンゲル、ヘヒステッテル、フッガー」の如き織物業の組合より出でし成金黨と、「ヤコフ、ヘルブロット、ハンス、プラントマイル、ホルヘルム、メルツ」の如き毛皮品製造組合より出でし成金黨と、「ブルカート、チンク、グランダ、マインリヒ、ウオラント、スタムラー、スツンツ、ガスナー、ウルスラット、クラフター、リンク、アドラー、ホザー」の如き手工業的商業組合の階級より出でし成金黨とは、其資産の集積に於て何等地代に負ふ處なし。(十五)

斯くの如く、地代なるものが、當時に於ける資本構成本力として必ずしも主要なる意義を有せざることは、果して何れの理由に、基くやと云ふに、その第一は當時の都市にありては所謂草創名主なる舊家の地主以外に大地主の存せしこと、第二は土地貸借に關する法律的慣習、第三は市の手工業者に對する保護等を主なる原因となす、即ち第一の理由に就きては、中世以來、獨逸の諸都市に於ける土着の町人が自己の所有地の一部を新しく移住し來りたる手工業者或は營業者に貸與し、或は賣却せんとするに際して、常に激烈なる反抗を寺院の如き大地主より受くるを常とせり、何となれば寺院其他の宗教上の團體にありては、單に土地の賣買が基督教の精神に背く理由よりも、寧ろ世上の善男善女の寄進によりて増加する其所有地によりて出來だけ、實際上の價値を得ん爲め、賣却又は貸與の際には町人と競争して、其利益を自己の囊中に收めんとするにあり、第二の理由としては土地貸借關係に於て十二世紀の中期より十三世紀にかけて最も多かりしものは永代借地にして、一時借地に至りては極めて小範圍に於てのみ履行せられたり、但、此一時的借地も其實、永代借地と相去る遠からざるものにして、短きは八十年、長きは千年に亙れり、斯くの如く土地價額の増加につれて借地料の變化せざることは、又た地代により

て資本を構成するの不可能なる所以なり、況んや、當時、獨逸の都市中には市の商工業を發達せしむる爲め、大に手工業者を歡迎し、地代を貪ぼる地主に對しては大に反抗して、是等新入者を保護せし事實あり。(十六)

次に資本主義發生の歴史に於ては古からずと雖、爾餘の伊太利諸市に比して然かも、ゾムバルト説の可否を判定するに最も好都合なるは、フロレンスたり、何んとなれば此都市にありては金屬採掘の事實は極めて少く(十七)、殖民經濟に至りては全く之れを缺如せり、故に、ゾムバルトに従へば、勢ひ此都市に於ける資本主義發生の根本條件は之れを地代の集積に求めざるを得ず、ゾムバルト自からも、かく信じたるが如し(十八)、然り、彼は單に之れを信じたるのみならず、更に進んで同市に於ける人口の増加が十三世紀以來、アルノ河の彼岸に於ける地價をして騰貴せしめ之が地代は、フロレンスの資本力に大なる影響を與へしものとなすも(十九)、然も事實上、當時同市に於ける資金の充實は寧ろ商工業の發達に歸す可きもの多く、所謂地代の集積作用が薄弱なることは、當時に於ける同市の富豪たる、モッチ、バルデー、プレスコバルデー、ベルチー、スピニー、チェルチー、レルラ、ベルラ、アルファニー、アルチ、リムベルチニー、スカラ、パアルコニエリー、パッチ、カヴルカンチ、メヂチ、アッチアイ

ウオリ、ストロッチ、ヘルリ、アバチ、ジャン、フオニリアチ、ペルチ等何れも此方面の地面に關係すること少きを以て知るを得可し、殊に十三世紀の終末に於て非常なる財力を有せし「フランチジ」の如きは徹頭徹尾同市内に何等の土地を所有せず、彼は自己の郷里より直接佛蘭西に轉じ、茲に大金權家と化するに至りしものなりとす、蓋しフロレンスに於ける地價の騰貴は、同市に於ける資力充實即ち資本的基礎の上に築かれたる商工業の發達の結果たり、グムバルトは實に原因と結果とを顛倒せるものなりとす、蓋しフロレンスの財力をして豊富ならしめし主要なる原因は法王が政治上の一大勢力者と化せし結果、戰爭其他土木事業等に對して出費を要すること多く、爲に「トスカナ」地方の寺院及修道院等は十分の一税以外に種々の名目、下に納金を命せられ、其度毎に調金をなすものは、フロレンスの富豪にして、彼等は此間に立ちて非常なる利益を收めたり、又た彼等の中には極めて大仕掛けに鎧甲、槍等の武器を製造して、バルセロナの王、アラゴン、ネーブルスの王等に賣却せしものあれば、(廿一)ネーブルス王國所産の穀物を獨占的に地中海の各港に輸出せしバルヂ、及「ペルッチ」兩家あり、(廿二)其他英國産の羊毛を「フランダ」地方に輸出し、殊に十四世紀以後は同品を海上より、以太利の市場に齎らせしが如き、又た「フランダ」

及佛蘭西産の綿布を「フロレンス」に輸入し更に精選して販賣せしが如き、いづれも同市の資本力を豊富ならしむるに預つて力ありしものなりとす、(廿三)之れを要するに「フロレンス」に於ける資本主義發生の歴史は之れを地代其者に求む可きものにあらずして、寧ろ政治的關係より醸されし經濟上の變化に歸するを正當なりと信ず、彼の詩聖「ダンテ」は不朽の作、神曲に於て當時の富豪が卑賤の間より起りしことを云へり、「グムバルト」が故らに自己の説を成立せしめん爲め「Uberti」及「Gucci」の同名異人を同名同人となせしが如きは、寧ろ著者の爲めに、惜まざるを得ざるなり、(廿四)次に「ベネス」に對しても、「グムバルト」は自己の主張たる地代説を以て之れを律せんとせり、今日知るを得るものにして同市に關する最も古き記述者たる「カシオドル」の云ふ處によれば、其年代は五百三十七八年頃此地の住民は航海業に熟達し且つ彼等の生活は主として漁業と製鹽業とにありと、(廿五)「グムバルト」も亦た後者を以て「ベネス」に於ける最初の産業となせり、(廿六)蓋し吾人が「ベネス」を考察するに就きて注意す可き事項は所謂「ベネチア」市(八百九年以來以前に既に同地方に商業の存せることなりとす、若夫れ商業と海運とが「ベネス」に於ける資本主義發生の主要なる原因たりしことは、十二世紀の後半期に輩出せし「ロマーノ」マイラノの事績に

於て證するを得べく、(廿七)又た此地に於ける商業上の利益は普通十パーセントなるも時に百パーセントに達せし事實に就きても知るを得可し。(廿八)

註一、K. Marx, Das Kapital, BI S. 679-726

註二、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, BI S. 282-299

註三、M. Koltz, Beiträge zur Geschichte des Patriziats in den deutschen Städten vor dem Ausbruch der Zunftkämpfe (Strassburg; Basel, Worms; Freiburg i Br.) S. 57 u. 72

F. Lau, Entwicklung der Kommunalen Verfassung und Verwaltung der Stadt Köln bis zum Jahre 1396 S. 121

C. W. Pauli, Lübeckische Zustände zu Anfang des XIV Jahr. S. 44.

C. Wehrmann, Das Lübeckische Patriziat. (Hansische Geschichtsbücher, Jahrgang 1872. S. 93)

W. V. Bippen, Geschichte der Stadt Bremen. BI S. 174 u. 228

註四、R. Hüpke, Die Entstehung der grossen bürgerlichen Vermögen im Mittelalter. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung, und Volkswirtschaft im Deutschen Reich 29 Jahrg. S. 245

註五、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. BI. S. 299-324

註六、A. Schulte, Geschichte der mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien BI. S. 648.

註七、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. S. S. 303.

註八、I. Strieder, Zur Genesis der modernen Kapitalismus. S. 43

註九、I. Strieder, S. 41-57

註十、I. Strieder, S. 58

註十一、Skoltzbiensch, Hohl, Eydenthaler Mullerssen, Schongauer, Falkenwein, Fiedeler, Schroter, Huhnlocher, Banwolf, Rechliger, Ravenspinger, Portner, Halligrabe, Krenutz, Riederer, Morshaupt, Hofmann, Rapoldt, Ketzlmann, Preyning, Bilschlin, Langemannl von Sparr, Winkler (?), Pfehner, Hangenor, Luitfrid Pfiel, Vanden, Hermannos, Onserg, Dillingen, Myrner, Gollenhofer, Vögelin, Kuller, Zollinger, Glaner, Halbherrn, Goldox, Bach, Dornauer.

註十二、Reu, Langinger, Dachs, Meuting, Egen, Preisshuh, Dandrich, Vitthel, Nördlinger, Langemannle mit dem R. Velmann, Die von Hory, Schöndcker, Welsler, Hoker, Gossembröt, Reinboft, Herwart, Wessisbrunner, Karg, Sulzer, Ilsung, Pfister

註十三、I. Strieder, S. 87.

註十四、I. Strieder S. 83-138

註十五、I. Strieder S. 142-215.

註十六、I. Strieder. S. 67-89

註十七、十三百十三年「カメラルンキオ」附近に於て銀坑發掘せられ一時市民の企業熱を沸騰せしこと其後此事業に就きて記する處なきは明かに此事實の一時的名ることを知らむ。(R. Davidson, Forschungen zur Geschichte von Florenz. II. S. 308

註十八、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. S. 295 n. 318

註十九、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. 323

註二十、R. Davison, Forschungen zur Geschichte von Florenz. 4. T. S. 269-270

註二十一、R. Davison, Forschungen zur Geschichte von Florenz IV 211a, 255, 264, 274, 282, 286, 383, 487, 652-1070

註二十二、R. Davison, IV S. 278

註廿三、R. Davidsohn. IV S. 280  
 註廿四、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. BI S. 320-321  
 註廿五、Cassiodor Variarum lib XII, 24  
 註廿六、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, BI. S. 315  
 註廿七、R. Heynen, Zur Entstehung der Kapitalismus in Venedig S. 122  
 註廿八、H. Sieveking, Aus venezianischen Handlungsbüchern, Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung & Volks-  
 wirtschaft. 25 Jahrg. S.1516.

六

之を要するに、ゾムバルト教授が近世資本主義發生の根本條件に對する中心思想は、凡そ巨額の財産なき處に資本的企業は望む可からず、而して中世都市に於ける巨額の財産は地代の集積を除きては他に考ふること能はずと云ふにあり、かくて彼は此統一的思想を以て幾多特殊の意義を有する歐洲諸國の都市に律せんとせり、斯の如き特殊の現象の普遍化と、資本の非人格的説明とは、ゾムバルト教授をして、何等現實界に求むること能はざる、一種の物的史觀の蜃氣樓を吾人の前に出現せしむるに至れり、遮莫彼が所論の生硬と矛盾とは、吾人をして尙ほ彼は將來發達するものなりとの希望を抱かしむ、吾人は此希望が將來に於て充たさるゝの日あらんことを祈るものなり。(六月十五日、細雨霏々たる朝脱稿)

貨幣數量説に關する諸説

神戸正雄

目次

緒言

(一) 貨幣數量説の肯定説

- (a) 貨幣數量を以て物價決定の直接原因とするもの
- (b) 貨幣の數量に商品の數量を對置するもの
- (c) 貨幣の數量に貨幣の需要を對置するもの
- (d) 貨幣數量を以て物價決定の間接原因とするもの
- (e) 貨幣數量の變化が貨幣の價值評定を通過して物價に影響すとするもの
- (f) 貨幣數量の變化が商品に對する需要の變化を通過して物價に影響すとするもの
- (g) 貨幣數量の變化が金利を通過して物價に影響すとするもの
- (h) 貨幣數量の變化が金利の外に企業の景氣を通過して物價に影響すとするもの

貨幣數量説に關する諸説